『広島平和科学』39 (2017) pp. 95-115 ISSN 0386-3565
Hiroshima Peace Science 39 (2017)

被爆体験継承における「平和観光」の可能性：「参加型継承」の視点から

ファン・デル・ドゥース・ルリ
日本学術振興会外国人特別研究員・広島大学平和科学研究センター外国人客員研究員
川野　徳幸
広島大学平和科学研究センター

Can the Atomic-bomb Experiences be conveyed through "Peace tourism"? : The Case for a "Participatory Heritage" Approach

Luli van der DOES
JSPS International Research Fellow, IPSHU Visiting Researcher
Noriyuki KAWANO
Institute for Peace Science, Hiroshima University

Abstract

Hiroshima's two world heritage sites, the Atomic-bomb Dome and Miyajima Island, are both major Japanese tourist destinations. A recent dramatic increase of visitors to the former was partially boosted by the 2016 visit of former US President, Barack Obama, and by the 2017 Nobel Peace Prize award to ICAN. This trend may prove to be an opportunity to provide peace-education for the visitors, while taking into account concerns about the commodification of the memorial sites of human catastrophe. Hiroshima now has a double task: catering for the needs of the tourists and supporting the local community's mission to pass on the memory of the Atomic-bomb experience. This empirical study explores the possibility of conveying the memory of the Atomic-bombing of Hiroshima through "peace tourism". The historical relation between the concepts of "peace" and "tourism" in Hiroshima is reviewed and both the conflicting and converging viewpoints (i.e. "gaze") of

the tourists and the local community are discussed, leading to the question of whether the city's "Peace Principle" is shared with the tourists or not. To explore this question further, tourists' reviews in Japanese from 2009 to 2017 published on TripAdvisor, an international 'word-of-mouth' travel information website, were analyzed using an interdisciplinary methodology, utilizing descriptive and explorative statistics combined with historical and critical discourse analysis to ensure triangulation. The results suggest a potential to transmit the "participatory heritage of the Atomic-bomb experience" through "peace tourism".

1. はじめに

広島のシンボルとも言うべき「原爆ドーム」は、1915年に広島県物産陳列館として開館し、戦前は広島の商業と文化の拠点だった。中央の階段を覆うドーム型の屋根が印象的な、近代技術を駆使した西洋式洋館で、豊かさの象徴でもあった。しかし、人類史上初の原子爆弾投下により、十万人を超える命と広島の街が一瞬にして消え去り、焼け落ちた洋館はその鉄骨がわずかに原型をとどめる瓦礫の墓場と化した。時を経て、原爆ドームは片仮名の「ヒロシマ」のシンボルとなり、1996年には、「核兵器の恐怖を物語る生き証人として」ユネスコ世界遺産に登録された(広島平和記念資料館編 2015)。被爆70有余年を過ぎてもなお、原爆ドームを訪れる国内外の観光客は多い。2015年のオバマ前米国大統領訪問や2017年のICANノーベル賞受賞、さらに「負の遺産」を観光対象とする時代の潮流と相俟って、近年、訪問者はさらに激増している。しかし、原爆ドームとその周辺を「平和観光」することについて、反対の声も多い。悲惨な死と、壮絶な生きるための闘いを表象する「被爆の記憶の場」が、観光対象として娯楽・商品化されるのを懸念する声である[1]。果たして、被爆の実体験の場をめぐり、記憶継承活動と観光推進活動は、共存できるのだろうか。第三者が、観光を通じて、原爆被爆体験を学ぶことは、本当に可能なのだろうか。

本稿では、被爆体験継承における「平和観光」の可能性を実証的に考察する。まず、広島の戦前・戦後における平和と観光の関係性を歴史的に概観する。次に、広島平和記念公園内での観光活動に焦点を当て、平和観光の範疇で「消費対象の場」に訪れる観光者の視点と受け入れ側の市民や被爆者の視点とを対比しつつ、両者の交流における問題点を探る。さらに、観光者が広島に何を求め、何を観光し、何を得ているのか、を統計学的手法を援

[1] たとえば、広島平和記念公園ボランティアガイドの村上正晃の指摘。次のURLに詳しい。「意見の重さを知って欲しい～ 原爆ドームのイルミネーションについて、24歳のボランティアガイドが考えたこと」http://www.huffingtonpost.jp/masaaki-murakami/hiroshima-illumination_b_16143902.html (2018年2月1日閲覧)。

用しながら、実証的に考察する。特に、戦後の復興時、平和と観光とを結ぶ政策が展開されてきた背景を踏まえて、広島市が掲げる「平和観光」と「継承」の理念が、観光者に伝わっているのかどうかに注目する。そのため、ソーシャルメディア上で観光者自身が公開・共有している情報を収集し、データとして整理したものを多量域的社会言説分析手法を用いて精査し、その主な特徴と傾向を観察する。最後に、その結果から、「被爆体験」をめぐって、観光する側とされる側、双方の視点を比較検討し、観光を通じた参加型の被爆体験継承という、いわば新たな「平和観光」の可能性を提示する。

2. 広島の二つの観光資源

広島には、二つの世界遺産がある。その相乗効果もあって2016年の年間観光客数は1200万人を超え、日本有数の観光都市の一つとして数えられる。世界遺産のひとつは、「安芸の宮島」の名で親しまれる日本三景のひとつ、「厳島神社」である。神社は、面積30km²ほどの、瀬戸内海に浮かぶ原生林に包まれた小島の入江にあり、11世紀に関西地方を拠点に勢力をふるった平清盛が建立したと伝えられている。水中に建てられた木造高床式の神殿は、緑の森を背景に、白壁と朱色の柱が映える。満潮時、青い海からそびえ立つ朱色の鳥居の姿は、美しく荘厳だ。千年の時を経て人々に愛されてきた日本的文化の遺産である。

もう一つの世界遺産は、「原爆ドーム」の呼称で有名な、登録名称「Hiroshima Peace Memorial (広島平和記念碑)」である。1945年8月6日午前8時15分、人類の歴史で最初の原子爆弾がアメリカによって投下され、核の時代が到来したこと、そしてその傷跡を伝える「負の遺産」と言えよう。「時代を超えて、核兵器が世界からなくなることや平和の大切さを訴えつづける人類共通の記念碑」とされている[2]。原爆ドームの立つ広島平和記念公園は、一瞬で半径およそ2kmの街と数多の命を焼き尽くした原爆の爆心地の跡地を、平和の祈りの地として、また、緑の公園として復興させたものである。ここでは、核問題と平和を考える多様な催しが開かれており、世界各国要人から一般市民まで、実に幅広い層の人々が集う場でもある。特に毎年8月6日の平和記念式典には、国内外からの参列者が広島平和記念公園を埋め尽くす。

1947年以来、式典で毎年続けられてきた「平和宣言」で、歴代の広島市長が一貫して訴えてきたメッセージは、被爆体験の視点から、被爆者援護を訴えつつ、世界を一つと捉えて普遍的な平和を希求し、核にまつわる時事問題に取り組み続ける努力である(松浦ほか2013)。式典の模様は、メディアを通じて日本全国や海外にも報道され、「平和」の誓いの場としての「平和都市ヒロシマ」を広く印象付ける。同時に、原爆ドームと広島平和記念公園は、原爆の記憶と平和の象徴の場として、認識される。

このように、一口に広島を観光するといっ

[2] 公益社団法人日本ユネスコ協会連盟 http://unesco.or.jp/isan/list/asia/hiroshima/ (2017年12月1日閲覧)。

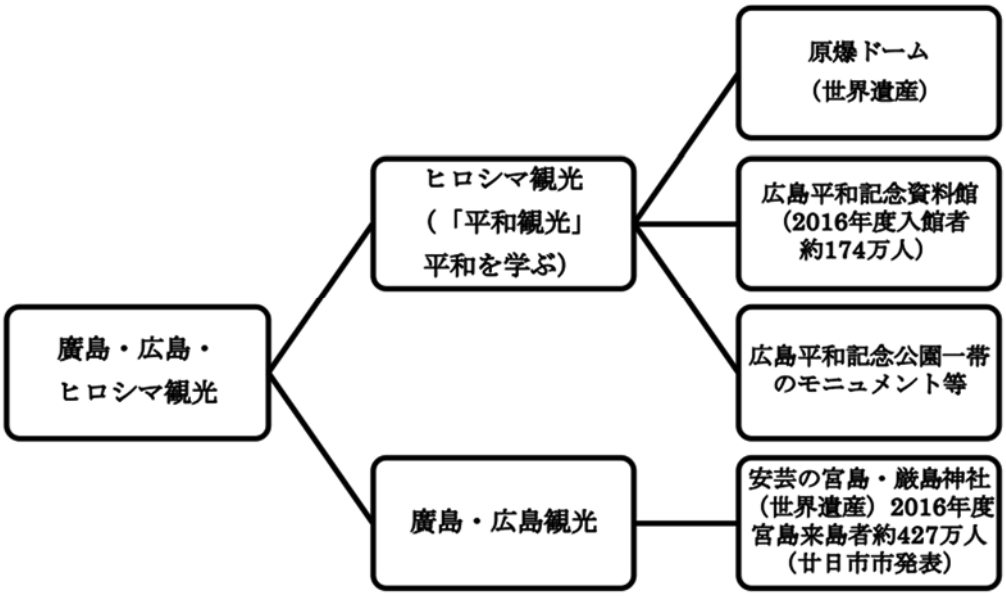


図１　広島の観光の二面性

ても、大きく分けて、二つの側面があると考えられる。日本的文化遺産の一つである宮島観光と、原爆ドーム・広島平和記念資料館などを観光する、いわば「平和観光」がそれであり、図式化すると図1のようになろう。周知のように、この二つの世界遺産は、陸上と水上双方のルートでつながっており、観光に不可欠な要素として移動の簡便性が担保されている。前者は、広島市民の生活の足であるJRと広島電鉄の宮島線路面電車で、後者は、アクアネットの観光船である。宮島と原爆ドームを結ぶ観光経路は、実に1950年代以来、陸路および水路で広島のインフラ整備の後押しをしてきた。つまり、「平和」の概念と「観光」の概念が、広島の復興と発展に直結し、市民の生活を潤してきたのである。このように、二つの世界遺産は、「日本古来、連綿と続く歴史の象徴、厳島」と「国際的な歴史と未来平和の象徴、原爆ドーム」として、広島の二つの代表的な歴史的側面を相互に強調している。長い歴史を反映して、前者は旧字体の「廣島」の遺産、対して後者は、世界に「平和と人権の尊さを訴える」[3]「ヒロシマ」の遺産として位置付けることができよう。

宮島観光は広島の名所観光とされるが、原爆ドームを含む広島平和記念公園の観光は、平和観光といえるのだろうか。名所観光は、有名な場所を見ることを目的とするが、平和観光の目的が平和を学ぶことと定義する場合、平和と名のつく場所を訪問することが、直接、平和を学ぶことにはならない。そもそも、なぜ、どのような経緯で被爆後に広島が「平和」都市と呼ばれるようになったのか。なぜ、原爆ドームと観光が結びつくようになったのか。「広島」と「平和」と「観光」という三つの概念の関係を考察するには、まずは歴史的背景を紐解く必要があろう。

日本三景のひとつ宮島は古来より観光名所で、広島はそれを訪れる観光者の足場であった。大正・昭和時代の日本の観光ブームにの

[3] 広島県観光連盟ウェブサイト https://www.hiroshima-kankou.com/world-heritage/world-heritage/top（2018年2月1日閲覧）。

って、一世を風靡した吉田初三郎の全国津々浦々の鳥瞰図でも、宮島が前面に置かれ、広島はその背景となっている。吉田が1930年代に作成した、国際観光局の国外向け観光キャンペーンポスターは、海外でも風光明媚な日本のイメージを広めた。ところが、原爆投下からわずか五ケ月後、被爆者からの聞き取りをもとに、吉田が作成した「広島原爆八連図」の構図では、燃え盛る広島が中心に据えられ、宮島はランドマークとして左隅に追いやられている。同作品は、連合国軍最高司令官総司令部民間情報教育局(CIE)の監修で、広島観光協会の推薦を受けて、広島図書から1949年に発行された『HIROSHIMA』と題する英文の小冊子に収録されている。この頃すでに、「復興する平和都市広島」が宮島と一組で「観光」と結びつけられている。広島の二大観光資源である原爆ドームと宮島の密接な関係を、国内外で広島のアイデンティティとして位置づける傾向は、被爆後の早い時期に始まったものと見受けられる。75年は草木も生えない「死の街」というレッテルを払拭し、焦土からの復興を進めるため、観光産業を通じて、人と物の流通を盛んにし、敗戦と被爆後の二重の打撃に困窮する広島の市民の生活を救済するための試みだった。1948年から49年にかけて「ノーモア・ヒロシマズ」という、平和のメッセージと広島の現状を描いた映画も作成された(西本 2015)。復興資金を国内外から募り、観光客を誘致する目的で作られた観光映画である。だが、GHQ介入により、作品の公開は禁じられた。被爆の「負」の部分の描写が検閲されたのであろう。ここでも、「観光」における「平和」の解釈と表現が争点となっている。

平和と観光は、終戦後の復興資金調達と被爆者救済も含む国家的社会保障の獲得を目指した地方自治体が自助努力のプロセスの中で結びつけた。先述のように、日本の官民が自主制作し、被爆後の悲惨さを描いた映画の公開を禁ずるとともに、迅速な復興を強調した観光冊子をCIEの監修下で出版した経緯から、深刻で長期にわたる核兵器による身体への影響、環境への影響を矮小化する米国の圧力がみてとれる。その対価として、広島は復興への支援を得て、「平和」を掲げた観光地化を通し、インフラ整備が進んだ。中川(2015: 37-39)によると、1949年3月、濱井信三広島市長、任都栗司市議会議長、松本瀧蔵衆議院議員が、GHQ/SCAP国会議事課長ジャスティン・ウィリアムズに広島のインフラ整備の必要性をかけあっている。このころ、冷戦激化により、米国の対日占領政策が、日本の「非軍事化・民主化」から、「経済自立・復興」に転換したため、広島の「非武装のシンボルとしての平和記念都市建設の意義」がようやくGHQによって認知された。事実、先述の観光雑誌『HIROSHIMA』はGHQの支援下で作成され、同年に発行の運びとなっている。そしてついに占領軍の優遇措置を受け、広島平和記念都市建設法のもとに、現在の広島平和記念公園などが整備された。このように、広島は復興のため、1947年の「平和宣言」開始を皮切りに、「平和観光都市」というアイデンティティを構築していった。平和と観光をつなぐ広島の姿の発端がここにみられる[4]。

[4] 原爆ドームの保存と観光対象化に際しては、広島市民や産業界でも賛否両論あった。また、広島と長崎では原爆遺構の観光対象化において歴史的差異がみられる。詳しくは、福間良明(2016: 111-137)を参照。

観光は広島の「平和」に寄与してきたのだろうか。占領下の広島の平和観光地化は、「平和創出効果」（石森 1992）があったのだろうか。「戦争の悲惨さ」が観光を通じた交流の重要性を訴えるという理論がある一方(Blanchard and Higgins-Desbiolles 2015)、そのような見解は、戦争を前提とする観光の意義を彷彿させ、説得力に欠ける(滝 2014: 92)とする説もある。被爆後の広島平和都市構築と観光においては、逆に、終戦による紛争の不在こそが条件となって、観光を可能にした(池田 1996、滝 2014)ともいえる。先に挙げた英文観光冊子の『HIROSHIMA』には、観光が、広島を訪れる人と市民との間に、相互的な文化理解と信頼・尊重をもたらし、ひいては国家間の平和に貢献すると期待し、普遍的な民主的平和の理論に基づく観光を目指す(Edgell et al. 2013)という思想が見られる。同冊子には、「広島の印象」と題して外国人4人の投稿が掲載されている。まず、広島県軍政部のメージャー氏は、広島の人々の打たれ強さと復興力を栄えある功績と称し、連合国軍最高司令官総司令部民間情報教育局(CIE)のヘンケ氏は、広島市民が古い思想を捨てて民主主義による復興に注力していると報告、カトリック協会神父のラサール氏は、真の平和とは物質主義の精神に基づくものではなく、豊かな精神文化、正しいモラル、そして真の宗教によってのみ構築されると述べる。その一方で、当時の広島女学院高等学校教師のルイス（ロイス）氏は、「わたしたち」の原爆投下の過ちを悔いるとともに、ヒロシマの復興は「モノやカネ(“mere dollars”)」で「より大きく、より立派な街を作れば良いというものではなく(“not alone in rebuilding a *bigger and better city*”）」、「すべての人が互いに真の愛と思いやりを持って(“with real Love and Concern by and for all”)」、「日々のくらしを復興していくことが必要である（“its reconstruction must include... Daily Living”）」と述べている。つまり原爆が「命とくらし」を奪ったことと、生き残った市民の苦しみを理解し、「人」がまた立ち上がれるように支えることこそが、真の復興だ、と訴えている。さらに、「いかなる場所でも二度と原子爆弾が使われないよう国際親善に向けて協力すべき(“we must work toward international friendship that makes the use of another A-bomb anywhere impossible”）」と記している。これら4人のうちルイス氏の文章には、当時の広島市民の視点に寄り添おうとする意思が表れている。それぞれ視点が異なるこれら4つの見解は、「復興」、「民主的」、「平和」、「普遍性」、「精神性」、「原爆被害」、「あやまちを繰り返すな」、といったキーワードに集約できるが、同様のメッセージが、今日もなお受け継がれている。たとえば広島市は平和の取り組みとして、以下のように述べる[5]。

> 72年前、広島市は原子爆弾によって壊滅的な打撃を受け、多くの人命と街が失われました。辛うじて生き残った人々は悲しみを乗り越え、75年間草木も生えぬと言われた廃墟の中から、たゆまぬ努力により、また、国内外からの温かい援助も受けて、めざましい復興を遂げました。
>
> 広島市は、「平和の象徴」、「希望の

[5] http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/1110600391733/index.html (2018年2月1日閲覧)。

象徴」として、世界の人々から認められています。それは、被爆地ヒロシマとしての高い知名度だけでなく、世界の人々が、廃墟からの復興を評価し、核兵器廃絶と世界恒久平和を希求し続けている都市であることを知っていることに他なりません。

人類史上最初の被爆都市である広島市は、平和を願い、平和都市の建設を進めてきた先人の努力をしっかりと受け継ぎ、ヒロシマの願いである核兵器廃絶と世界恒久平和の実現を目指す「まち」であり続けなければなりません。そのためには、市民一人一人が被爆者自身の被爆体験や平和への思いを引き継ぎ、共有し、その思いを世界に広げ、各国の為政者が共感するようにしていく必要があります。

ここで特筆すべきは、最後の段落にある理念が、1949年の海外向け観光冊子の内容には見られず、平和都市ヒロシマ独自の被爆体験の視点と継承の理念が掲げられ、被爆者の思いが凝縮されている点である[6]。果たしてそれは、観光者に伝わるのだろうか。

3. 観光者のまなざしと被爆者の思い

広島市が掲げる「市民一人一人が被爆者自身の被爆体験や平和への思いを引き継ぎ、共有し、その思いを世界に広げ」るという考え方は、広島市民が、被爆体験の「当事者」の視点を持つ、ということにほかならない。それに対し、平和観光都市を訪れる「観光者のまなざし(“the tourist gaze”)」(Urry 2011)は、外部者が「本場の・本物の」感覚を現場で実体験することを求めるものである。観光者の視点からすると、被爆地ヒロシマは、観光地であり、消費の対象であり、被爆の「当事者として視点の共有」を求めるものではない。「観光者のまなざし」は、訪問先とそこに存在する人に何らかの期待を持って向けられる。まなざされる(見られる)側は、見る側の価値観や要求を受け入れ、時にはその評価基準や価値観に応える義務さえ感じる(Foucault 1995)。そして、そこに、観光という行為を挟んで、見る側と見られる側の間に不均衡な力関係が生じるのである。この現象は、インターネット上の口コミサイトへの投稿文などにも顕著に現れている。観光者同士が無料で情報交換できるグローバルなサイト、トリップアドバイザーを事例にすると、観光者が、レストランやホテル、遊興場などを星の数で採点し、批評している。同様に、商業目的施設ではない原爆ドームや広島平和記念公園も、評価の対象になっている。口コミには、「原爆ドームは期待していたのより小さい」、「ピースボランティアに話を聞いたけど、本物の被爆者を出してほしい」という投稿もあり、広島とその市民を「消費対象」として扱う観光者の視点がうかがえる。無償で「あの日」の体験を継承する語り部らも、娯楽を提供する側の一部とみなされ、評価の対象となり、甲乙を付けられ批判の対象となる。言うならば、「消費者」の要求に沿ったパフォーマンスが求められているのである。原爆ドーム前でふざけ、Vサインをしながら撮った観光写真がネット上で公開され、「インスタ映

[6] 被爆者の思いについては、拙稿(2010、2015、2016)に詳しい。

え」するドームの撮り方が話題にも上るのである。そして、「見る側」の視点が暴走すると、被爆者や被爆地が、消費対象として「モノ」化される事態も、状況によっては起こり得る。

次に、視点を移して、「見られる側」の思いはどうであろうか。原爆ドームは、被爆体験の象徴である。被爆体験の「あの日」とは、「地獄」(川野ら 2018)であり、「むごい死に方」であり、何万人もの人々が、「何の意味も認めることのできない＜ものとしての死＞(石田 1986: 85)」を強要されたことである。原爆死没者慰霊碑と国立広島原爆死没者追悼平和祈念館は、焼けただれてぼろきれのような姿になった死者に、人間の尊厳を取り戻す思いをこめて、一人一人の名前を刻み、平和を祈る場である。だからこそ、人間の記憶を「モノ」化する観光のかたちがあってはならない。先に述べた平和観光冊子のように、被爆体験を「あの日」の「悲惨さ」に集約し、「その後」は「生存力と早い復興」に集約する二極化の言説に限定して、復興した被爆地ヒロシマを語るとき、そこに生きる人々の影は消される。それは、あの日の凄惨な記憶と、原爆後遺症と、崩壊した社会経済的基盤とを抱えながら生き続けてきた被爆者らの思いが不在の、無機質な視点である。

同様の視点は、近年、インターネットで拡散した国内外のダークツーリズムのサイトにおける広島観光の位置付けにも見受けられる[7]。ダークツーリズムという言葉には、多様な定義があるが、「死と災害に対する強い興味 “The Attraction of Death and Disaster”」(Lennon & Foley 2000: 3)に裏打ちされた「悲劇の現場を訪れる旅のありかた」(井出 2016)[8]という見方が一般的である。イタリアのベスビオ火山噴火で大災害に遭った古都ポンペイや、スコットランドのバノックバーン古戦場、ポーランドのアウシュビッツ強制収容所など、対象となる悲劇の種類は様々である。ダークツーリズムのあり方自体も多様であり、「他者の苦難を覗き見る愉悦—楽しみのダークネスという、人間性の醜悪な一側面」(市野澤 2016: 53)も指摘される反面、前向きな態度で学習することを強調する一派もある。「現地を訪れることで、書物だけでは感じることが難しかったリアリティを得られることは大きな意義」があるというものだ(井出 2016)。たとえば、「その地で起こったことを学び (“learn...events that took place there”)」、「一過性の感情のみではなく、日常を超越した (“It does not provide...only one time emotional experience, but also transcends our everyday existence”)」何らかの疑似体験によって、「記憶の場のメッセージを感じ取る(“perceive... the message of these sites”)」ことが可能だ、という見解もある(Hermanova & Abrham 2015: 30)。また、ダークツーリズムの在り方は、「死や苦しみと結びついた場所を旅する行為」を通じて、「その場所のネガティブな側面に目を向け、地域における人びとの悲しみに思いをはせ、悼み、祈るもの」(遠藤 2016: 15)であるべき、という主張もある。ただし、ダークツ

[7] http://www.dark-tourism.com/index.php/japan (2017年10月16日閲覧)。
[8] 井出 明 (2016)「記憶の承継とダークツーリズム」(視点・論点)NHK解説委員室 http://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/400/252023.html (2017年10月16日)。

ーリズムとして広島平和記念公園や原爆ドームを扱うサイトは、惨劇と辛苦、犠牲自体が強調され、被爆者の「その後」の生活への言及が少なく、概してダークツーリズムの観光者の興味の対象にならないことに留意すべきである。

被爆を理解するためには、「その後」の理解が欠かせないはずである。なぜなら、濱谷(2005: はじめに)が指摘するように、「原爆に遭遇したことによる苦しみは、戦後過程において、むしろ積み重なっていったのである。それゆえ、〈被爆体験〉には、あの日から現在まで、原爆に被爆した人びとの身に起こったすべてのことが包み込まれていなくてはならない」からである。東日本大震災の被災地や、広島・長崎、沖縄など、過去の被災や戦災を乗り超えて、今もそこに生活する市民の、「見られる側」の立場を忘れてはならないし、見られる人々の尊厳をおろそかにしてはならない。東北の被災地では、悲劇そのものだけでなく、むしろそこから立ち上がる努力を全面に押し出した、「復興ツーリズム」という表現が使われている(岩崎 2014)。広島市の場合、「ダークツーリズム」という名称では、関心の対象が惨劇に限定されるので、そのような負の連想から脱却し、「前向きな印象」を目指すため、2017年から、原爆遺構を巡る「ピースツーリズム」の取り組みを始めた。「旅行者に平和への願いを共有してもらうため、原爆の惨禍や復興の道のりを伝える場所をじっくり見て」もらい[9]、過去のみならず、過去から脈々と続く現在、そして未来へと、視点の幅を広げる試みである。これは、広島市が現在積極的に取り組む被爆体験継承事業にもつながる。広島市は、2014年より「被爆体験伝承者養成事業」を開始したが、その趣旨は、自らは被爆経験のない世代が、市の養成コースで被爆者の実体験から原爆被害を学び、後世に被爆体験を語り継いでいくというものである。[10]

4. 広島平和記念資料館と観光

原爆ドームとともに広島平和記念公園の中心に位置する広島平和記念資料館は、被爆体験の継承において、広く国内外の人々が、被爆体験の記憶に触れる重要な場である。展示物の説明書きは極力短く、事実的証拠に基づくものに限定し、来館者が展示物自体から感じ、知識を得て、考察を深められるように配慮されている[11]という。海外での評価も高く、国際博物館評議会の倫理委員会会長イェルコビッチ氏は、「必ずしも誇れない、覆い隠し歴史記録から抹消したいような、物議を醸す史実やトラウマとなる記憶を、敢えて展示することで、訪問者が自らの経験の枠を乗り越えて、様々な観点から考察する機会を提供している」と評価する(ブルノ国際会議基調講演、International Council of Museums 2017)。また、綿密な調査研究に基づいて事実的証拠に裏打ちされた展示を目指した成果は、「広島の犠牲とともに、侵略的な戦争における軍港としての広島の役割」も明示し、事実に基

[9] 2017年8月6日日本経済新聞『広島 原爆遺構を巡って 「ピースツーリズム」市が提唱～ドーム・資料館以外も発信』。

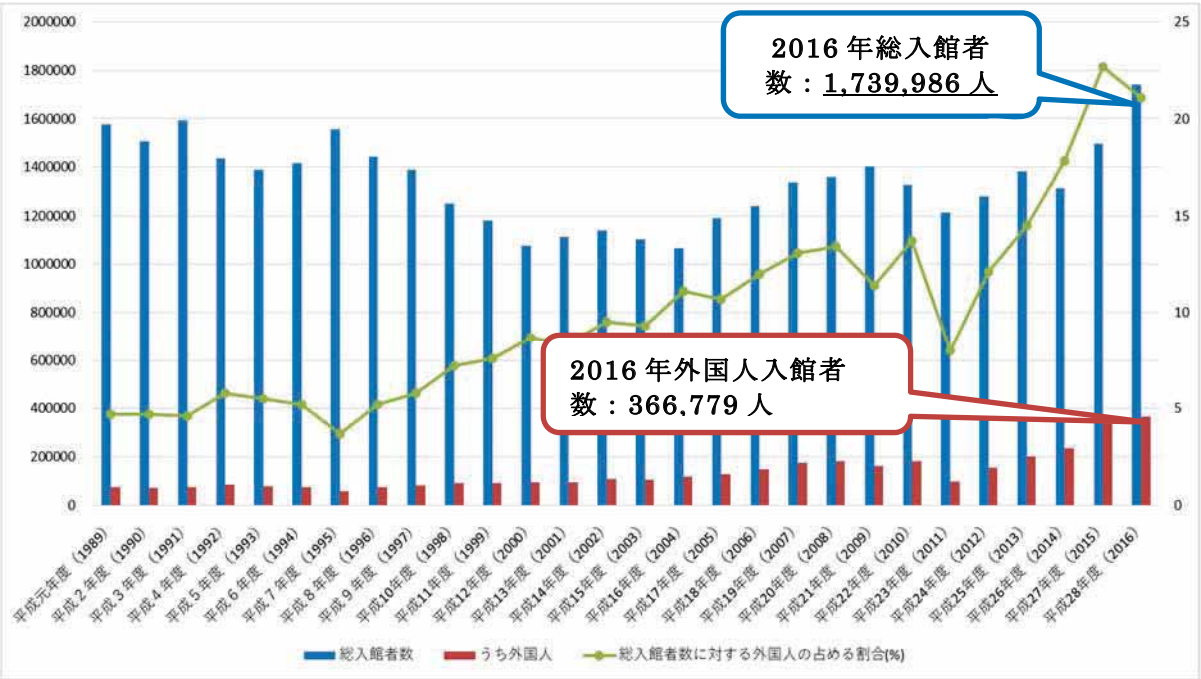
[10] この事業内容については、次のURLに詳しい。http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/1438676263282/index.html (2018年2月1日閲覧)。

[11] 志賀賢治広島平和記念資料館館長談 (2017年11月21日)。

づいた客観的な歴史認識を促している(Seaton 2007: 50)。このような評価は、国内外からの来館者数にも反映されているようである。

既述の通り、広島市を訪れる観光客数は年々増加し、2016年の観光客数は約1,200万人である。特に、オバマ前米国大統領の広島訪問以来、広島平和記念公園の海外での知名度が上昇したためか、公園一帯や広島平和記念資料館を訪れる外国人観光客の増加がみられる。2016年には、来館者総数約174万人のうち外国人来館者数が約36万人で、両者とも過去最高の記録だった。その経年変化と内訳を示したものが図2である。このように、被爆体験を学ぶ場である広島平和記念資料館の入館者数は、ここ数年増加傾向にある。

次に、この広島平和記念資料館を訪問する観光者に注目し、実証的分析を行う。これは、先述の被爆と復興、観光の歴史的背景を踏まえて被爆体験を継承しようとする側と、観光目的で広島を訪れる側との間で、意思や目的の共有がどの程度あるのか、を探求する試みでもある。そこで、観光者の自発的な意見をインターネットの口コミから抽出し、広島の平和観光に対する彼らの見解を分析する。特に、戦後から展開してきた「平和(都市)観光」の意図や理念が、観光者に伝わっているかどうかが口コミから読み取れるか、という点に注目した。以下に、広島市が掲げる平和の取り組みにおける継承部分の抜粋を再掲する。



出所：http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/1491263589626/index.htmlをもとに筆者ら作成。

意図・理念を表現する部分を特に下線で示す。

> 人類史上最初の被爆都市である広島市は、平和を願い、平和都市の建設を進めてきた先人の努力をしっかりと受け継ぎ、ヒロシマの願いである核兵器廃絶と世界恒久平和の実現を目指す「まち」であり続けなければなりません。そのためには、市民一人一人が被爆者自身の被爆体験や平和への思いを引き継ぎ、共有し、その思いを世界に広げ、各国の為政者が共感するようにしていく必要があります。(下線は筆者らによる)

これらの表現が、ロコミのテキストに出現しているかどうか、次に定量分析で精査する。データ収集に使用したトリップアドバイザー(TripAdvisor)は、ホテル等の旅行に関する情報・価格比較を中心とする世界最大の閲覧数を持つ旅行ロコミサイトで、一般公開ウェブサイトおよび無償アプリが提供されている。プライバシー保護のため、大多数が匿名投稿である。古い投稿も一定期間ウェブサイトに残っているため、今回の研究でも経年変化の調査が可能であった。グローバルサイトであるため、各国の言語でロコミが投稿されているが、本研究は、参加型継承に関する筆者らの研究プロジェクトの第一段階として、まず広島平和記念資料館に関する日本語のロコミに限定し、分析した。総数972件を投稿日にもとづいて年度ごとに集計した。2009年資料は、2009年内に投稿されたロコミである。集計期間は2009年1月1日から2017年11月20日まである。各年の件数内訳は、表1の通りである。

2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017
18	19	28	79	78	163	201	213	173

表1　年毎のロコミ投稿件数(2017年は同年11月20日まで)

表1に示す通り、ロコミ件数は2014年から急増している。2009年から2017年を通じて、または年ごとに、広島市が掲げる平和都市の理念が、観光者のロコミにも反映されているかどうかを探るため、幾つかの言説分析を行いたい。まず、八地方に準じた区分による投稿数を調べた。その結果を示したものが図3である。関東地方が圧倒的に多く、次いで近畿、海外、中国地方の順である。なお、不明が多いのは、ロコミ投稿時に所在を記入しなくても公開が可能なためである。

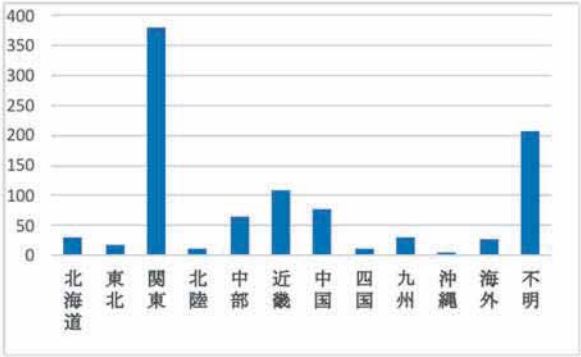


図3　地方別ロコミ件数

さらに詳しく都道府県別集計を示したものが図4である。ここで示すように、東京都が群を抜いて全体の約25%を占めている。次いで海外、神奈川県、広島県の順である。広島県の場合、東京に比べ人口は約五分の一だが、ロコミ数は四分の一弱と、対人口比では東京都よりも高くなっている。

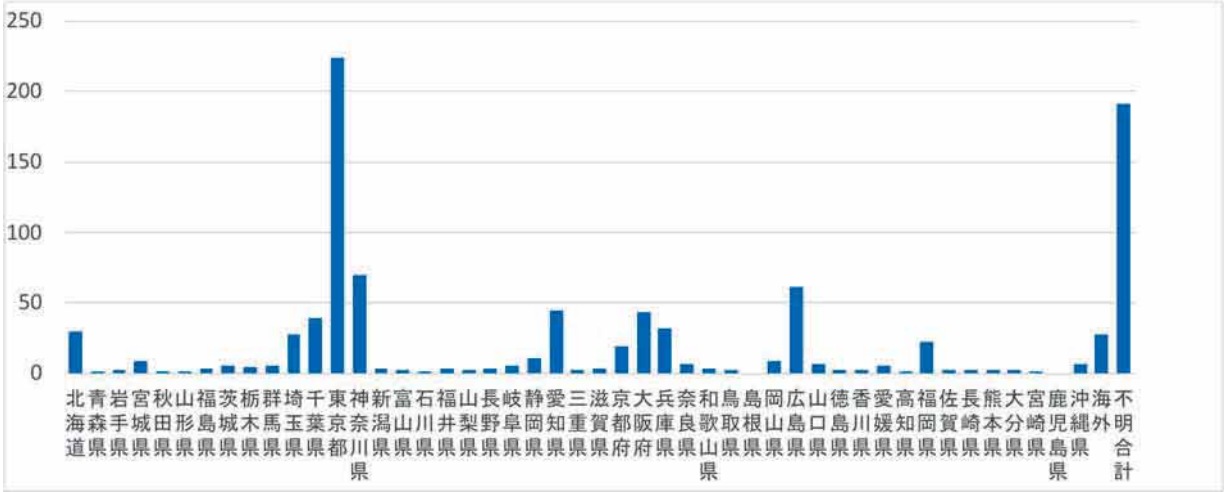


図4　都道府県別ロコミ件数

	平均	標準偏差	中央値	最小値	最大値	尖度	歪度
都道府県	3154.06	6787.39	680	0	37971	116.91	3.92
地方	14042.45	18197.63	5337	1778	63645	6.13	2.38

表2　各都道府県及び地方毎の総文字数に関する各種統計量

次に、サンプルの均一性を確認するため、各ロコミのテキストの長さについて調べた。全ロコミの総文字数は 159,115 字であった。表 2 に示す通り、都道府県間と地方間の偏差は大きい。先述の通り、その偏差は都道府県・地方間のロコミ件数の違いに由来している。これは相関係数によって確認されている(Spearman の順位相関係数、ρ=0,998)。また、正の数の尖度と歪度が示す通り、分布は原点寄り(左寄り)で、ピークが高く、右裾野が長い。

次いで、各都道府県のロコミ一件当りの平均値は、表3に示すとおり、平均約170文字、標準偏差は15文字と比較的均一である。

都道府県平均文字数	標準偏差	地方一件平均	標準偏差
168.65	57.77	170.21	15.43

表3　平均ロコミ文字数

ロコミ一件あたりの平均文字数は、図5の通り、地方間偏差(全国SD)が比較的小さく、都道府県においても同様であった。都道府県の一例として広島県の数値を示す。

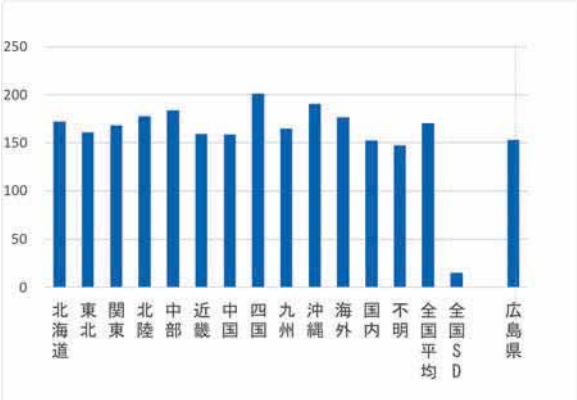


図5 地方別ロコミ一件当たりの平均文字数

以上より、ロコミ文の長さの均一性が担保され、ロコミ単位で、次に内容分析を行う妥当性が示された。そこで、共起ネットワーク分

析[12]を用いて、2009年から2017年11月までに日本語で投稿されたロコミで用いられた語群を用いてテキストの内容を観察した。この際、ロコミの語彙リストは出現回数および出現文書数で作成し、語間を結ぶエッジ数は標準的な75本ないし90本で抽出した。布置する語彙数は、原則的に回数で全体の2.5 %以上、文書数で0.5 %以上で行った。具体的には、30回以上出現、文書数で5文書以上出現した語彙を抽出している。共起ネットワークでは、語と語の距離ではなく、語と語をつなぐエッジ(線)の太さが、語間の関係性の強さを示す。また語の円が大きいほど出現回数が多く、色が濃いほど、テキスト群においてその語の中心性(重要性)が高いことを示す。

共起ネットワーク分析の結果を図6に示す。観光の目的地として「平和」「記念」「資料館」を「訪れる」ことから、当然、これらの語の重要性が高く現れている。しかしそこで、「悲惨」な「原爆」や「戦争」について「展示」を「見」て、「人」について「思う」という内容がみられることは、興味深い。つまり、観光目的で訪れた広島平和記念資料館で、人、つまり被爆者の思いにふれる、思いやる、または共有する機会が得られたという言説がロコミに現れている。「日本人」として「行

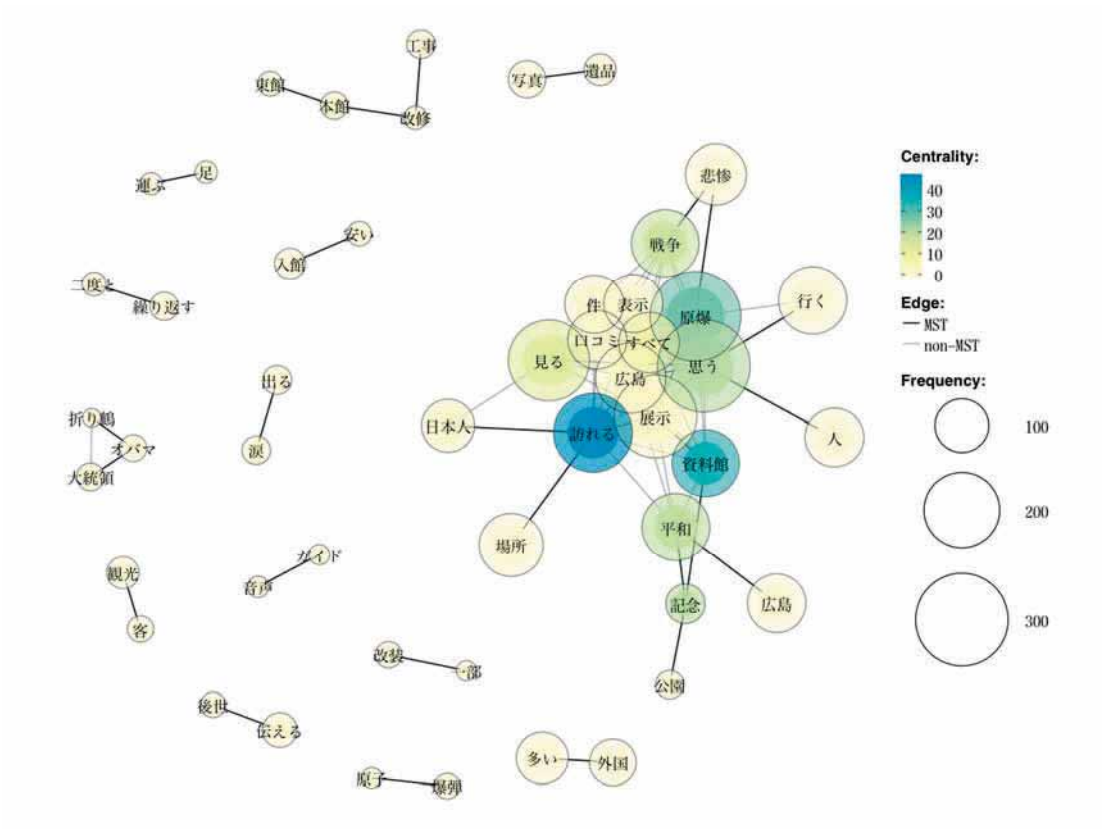


図6　2009年から2017年のロコミ頻出語間の関係

[12] 共起ネットワーク分析とは、内容分析の手法の一つで、自由回答のテキストから、その内容を特徴づける語を数理的に抽出し、テキスト内で特徴語同士が共起する関係をエッジ(語と語の間の線)で表し、語間や語群の関係および関係の強さの度合いをネットワーク図として可視化する分析手法である。なお、分析ツールはKH Coderを用いた。詳しくは、樋口(2014)を参照。

く」べき「場所」という投稿も多い。それ以外の小さなサブグラフに「後世」に「伝える」、「二度と」「繰り返す」ことが、あってはならない、という被爆体験の継承と平和祈念のメッセージが表れていることも特筆すべきである。このことは、広島平和記念資料館の観光で、被爆体験の継承に関わる平和の思いが観光者に共有されていることを示している。さらに、サブクラスターで、当時のオバマ米国大統領の来広時に報道された折り鶴や、広島平和記念資料館が工事中であることなども、観光者間でのリアルタイムの情報としてあげられている。いずれも2015年以降の傾向であるため、2009年から2017年の口コミ全体における割合いとしては、語群の存在が小さく現れている。

次に、対応分析により観光者の口コミ内容の各年の特徴を見た。その結果を示したものが図7であるが、バブルの大きさが語の出現頻度を示し、バブル間の距離が短いほど語間の関係性が強いことを示す。図7に示すように、2009年から2013年までは、内容にあまり変化が見られない。原爆について、「子ども」や、それぞれの「世代」が「学ぶ」機会を「本当に」「貴重」であると述べる内容が目立つ。「尊い」「平和」や「過去」の「犠牲」について「学べる」という意見も見て取れる。座標の原点に近いところ、即ちグラフの中心部は、2009年から2017年を通じて共通する語群であるが、やはり「資料館」を「記憶」の「場所」であるとし、「被爆」「資料」「展示」から、「原爆」について「知る」、「考える」、「思う」、「見る」とある。また、資料館の「ボランティア」についても毎年言及されている。

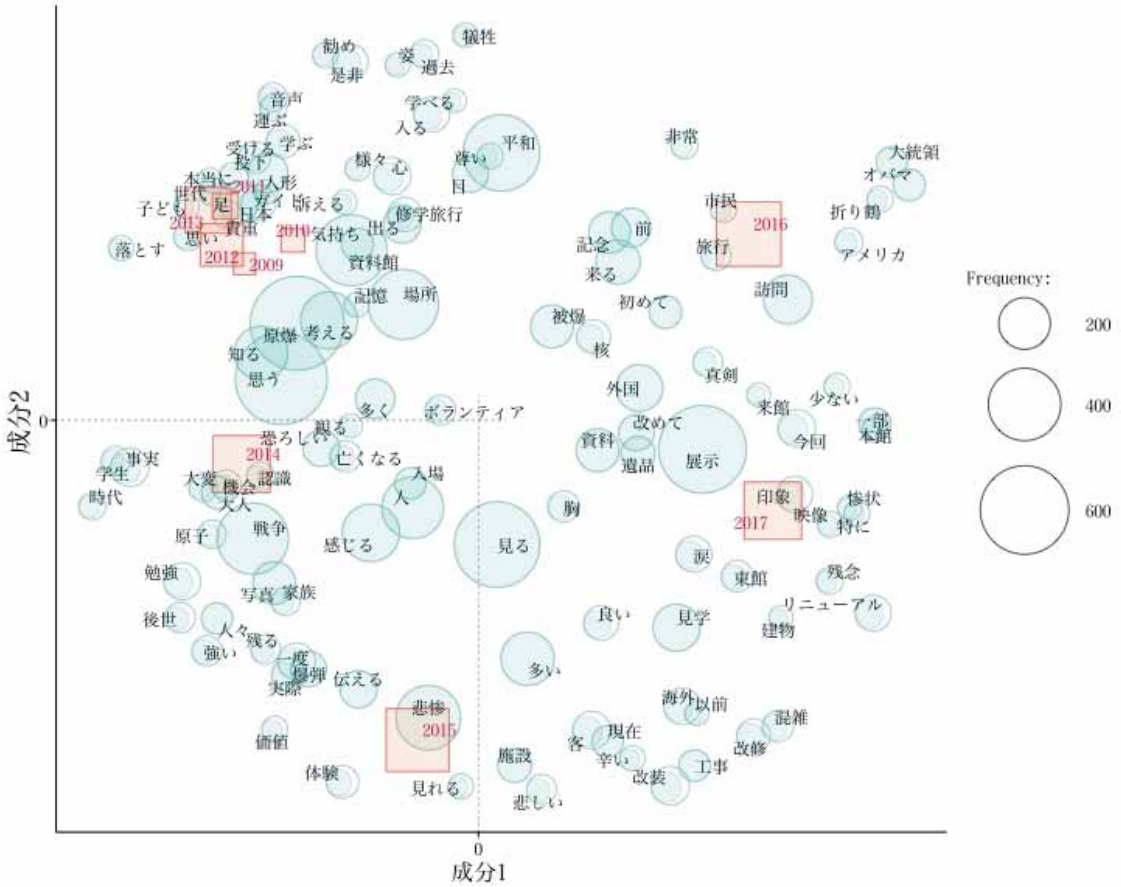


図7　2009年から2017年の口コミ内容の各年の特徴

2014年以降は、各年によってその特徴が異なる。たとえば、2014年は、「戦争」や「感じる」が強調されている。「家族」や「人々」の「写真」の「強い」印象が「残る」というのは、展示物・展示内容の印象であろう。続いて2015年には、「悲惨」さが全面に押し出され、「一度」は見る「価値」や、「体験」を「伝える」意義などが顕著に表れている。2015年から2017年にかけては、「施設」が「改装」「工事」中であること、「海外」からの「客」で「混雑」していることなどが頻繁に情報提供されている。2015年の「オバマ」「アメリカ」「大統領」の訪問と彼の折った「折り鶴」展示は、2016年の口コミの大きな話題となっている。口コミを書いた観光客が「初めて」来館し、「真剣」に「核」や「被爆」の「展示」と向き合った様子もうかがえる。2017年では、「展示」の中でも「特に」「映像」に言及し、被爆の「惨状」にふれて観光客が「涙」をこぼしている。本館が「リニューアル」中で「残念」という意見も多かった。

以上のように、口コミ内容は年ごとの特徴がある。他方、広島平和祈念資料館自体の機能的特徴に関する語(「原爆」や「展示」など)以外では、「思う」、「考える」など思考・考察・学習に関する語群の出現頻度が一貫して高い。これら思考関係の語は、大きく分けて個人的思考行動と対人的思考行動の二つの語群に分類できよう。個人的思考行動は、「思う、考える、感じる、知る、見る」である。文書数でみると、「思う」が全体の口コミの半数に近い41.56%に出現している。次に多いのは、「感じる」で、全体のおよそ四分の一を占める23.87%である。続いて、「考える」が18.62%、「知る」が17.49%、「見る」が15.74%となっている。他方、対人的な思考を介する行動は、前者の語群より出現頻度が低い。「伝える」が13.48%、「受ける」が5.86%、「学ぶ」が3.91%、そして「訴える」が2.47%となっている。これらをまとめたものが、次の図8である。

動詞	文書数(N=972)	%
思う	404	41.56%
感じる	232	23.87%
考える	181	18.62%
知る	170	17.49%
見る	153	15.74%
伝える	131	13.48%
受ける	57	5.86%
学ぶ	38	3.91%
訴える	24	2.47%

図8　思考的語の出現文書数・出現率

以上、思考的語群の出現数・出現率を見てきたが、口コミなどのテキストの分析の際に、重要な項目の一つが題名(タイトル)である。作文の慣習として、タイトルは、文章の重要なテーマやトピックを簡潔にまとめる機能を持っている。ならば、口コミの投稿者にとって特に言いたかったことが、タイトルに反映されている可能性は十分にある。そこで、タイトルのみを対象に思考的語彙の出現頻度とその割合を調べた。図8で上位にあった個人的思考行動に関する語群(思う、感じる、考えるなど)は、図9に示すように、やはり上位にあり、他方、対人的思考行動に関する語群(伝える、訴える、受けるなど)はそれよりも下位であった。

出現口コミ題名数		%	対出現文書比
考える	46	4.73%	25.41%
知る	26	2.67%	19.85%
見る	25	2.57%	6.19%
感じる	24	2.47%	42.11%
思う	18	1.85%	11.76%
伝える	17	1.75%	44.74%
学ぶ	6	0.62%	2.59%
訴える	2	0.21%	8.33%
受ける	1	0.10%	0.59%

図9　口コミタイトルにおける思考的語の出現数・出現率・対出現文書比

ます。子供が生まれたらぜひ連れてきて、生と死と戦争と平和について	考えさせ	たい、と感じた場所です。 広島市についてのEECCMM
一度は必ず行くべき場所。 3度目の入館ですが、 来るたびに	考えさせ	られることがあります。 今回訪れた時は、 フラワーフェスティバル期間中
ならば、 このような行動をとっていたでしょうか？ それほど	考えさせ	られる場所です。 広島市についての木古内Dさんのロコミをすべて表示する
増大している現在使われたらと思うと恐ろしくなります。原発再稼働についても	考えさせ	られます。
事故も何とか解決できないものか、日本中が抱えなければならない問題だと	考えさせ	られました。
	考えさせ	られます。 日本人なら一度は訪問するべきだと思います。じっくり見ると
さを生々しく伝える写真や展示物などもあり、一緒にいた子どもたちもいろいろ	考えさせ	られたようで、「教科書の中でしかなかった戦争は、やっぱり本当にあっ
はもちろん、各国の著名人のサインは興味深いものがありました。平和について改めて	考えさせ	られました。
た人々、家族の遺品などが展示されており、現代の私達に深く	考えさせ	てくれる資料館です。悲しい歴史ではありますが、決して見過ごしてはいけない
	考えさせ	られる場所 原爆が投下されるまでの詳しい経緯など知らなかった事がとても
投下、核の歴史を知る場であり、改めて平和の有難さ、大切さを	考えさせ	られるきっかけとなり、貴重な経験だったと思います。広島を訪れた際
知ることによって戦争の痛み、平和への願い、感謝を感じ今後の人生において深く	考えさせ	られ、人間一人としての役割を感じさせられる場所です。 広島市について
。展示物がたくさんあり、ツアーの時間だときつかった。改めて核のことを	考えさせ	られた。たくさんの外国の方が、熱心に展示を見ていたの
れました。印象は過去の記憶とは全く違うものでした。世代ごとに	考えさせ	られることができる価値ある資料館と思います。
、原爆の恐ろしさがよくわかるので非常によいと思います。そして、色々と	考えさせ	られます。戦争はいけない、核はよくないものだと頭ではよく
悲惨さ、戦争の怖さなど私たちが考えないといけないことをしっかりと	考えさせ	てくれる場所です。なぜこうなったのか？先人から学び、後世に引き継い
	考えさせ	られる場所です。 原爆の時に被爆した人や物の展示がさ
掛け見物しました。 人の命の大切さと、尊さをしっかりと	考えさせ	られる場所です。 焼けた瓦なども触ったりできるコーナーもあり、本当に
公園、原爆ドームと巡り、平和とは何か、戦争がいかに無意味かを深く	考えさせ	られる場所です。 広島市についてのクリオさんのロコミをすべて表示する
いかに被害が大きく、苦しんだ人々が多かったか、原爆の脅威等、色々と	考えさせ	られました。じっくり見ていくと時間が足りないくらいです。観光ついでで
思いも強くなります。今の自分が、いかに恵まれた環境にいるのかを	考えさせ	られる場所です。

図10　コンコーダンス分析による「考えさせ」の用例

このパターンは文書全体のそれと変わらなかったが、各語群内での順位は、文書数(図8)とタイトル数(図9)で大きく変わっている。特に顕著だったのは、出現タイトル数においては、「考える」という動詞が、「知る」や「見る」という動詞の二倍近く多く出現していることである。「思う」に比べて「考える」は思考の対象が明確に定められる。観光者は、広島平和記念資料館で何かはっきりとした対象について、思考したのである。言い換えれば、広島観光で広島平和記念資料館を訪れることが、観光者に、「考える」という能動的行動を起こし、しかもネットの投稿を通じて、まず、他人に伝えたい、という動機を起こさせたことが、この結果からうかがえる。

対出現文書比[13]をみると、「伝える」、「感じる」、「考える」、「知る」の順に、文書とその題名の双方にこれらの語が出現する割合が高い。観光で広島平和記念資料館を訪れた人が、被爆の実態を知ることで感性が動かされ、思考し、それを誰かに伝えようとする行動のパターンがうかがえる。この結果のみでは、伝えるものの内容の深さはわからないが、少なくとも「語り継ぐ」意欲が見出される。

続いて、思考の内容を、コンコーダンス分析で定量・定性的に確認したい。先にあげた出現件数では、「考え」を含む投稿数は245件であり、そのうち、広島平和記念資料館を訪れて何かを「考えさせ」られたという、思考の動機付けをあらわすコメントは、103件であった。図10はその抜粋である。

コンコーダンス分析をもとに、「考えさせ」という語の用例において、全体の傾向を顕著に表す例を次に四つあげる。まず、「考える」内容としては、過去の悲惨なできごとから学び、未来の核災害、核戦争を防止するため、考え、学び、伝えるべき、というものが見て取れる。たとえば、例1だが、インパクトが強すぎて言葉を失ったと言いつつも、被爆の事

[13] ある口コミ文書内に特定の語が出現した場合、当該語がその文書の題名にも出現する率。

実にふれた経験をトリップアドバイザーで語り、伝えている。例2と例3では、次世代に継承する必要性を指摘する。さらに、例4では、知ることで自分も「人間としての役割」を認識すると言う。(下線は筆者ら。)

(例1)一度は行かなければいけない、中身が濃くて未だに考えさせられることが多く最後は無言でした

(例2)原爆の悲惨さ、平和の大切さについて考えさせられました。残酷だから子供に見せないのではなく、事実をしっかりと子供たちに伝えていくことで戦争のない平和な世界が作れるのだと感じました

(例3)子供が生まれたらぜひ連れてきて、生と死と戦争と平和について考えさせたい、と感じた場所です

(例4)知ることによって戦争の痛み、平和への願い、感謝を感じ今後の人生において深く考えさせられ、人間一人としての役割を感じさせられる場所です

さらに、観光者は口コミで他の観光者に対し、上記の例1～例4のような目的で平和観光するよう薦めている。たとえば、「負の世界遺産として日本人は訪れるべき場所(中略)平和学習の貴重な建築物です。」と明言する投稿もある[14]。

以上のように、観光者は、特に広島平和記念資料館を「記憶の場」と受け止め、原爆について学び、感情が動かされている。被爆者の経験や感情を想起し、気持ちを共有し、平和の尊さを訴えるという投稿が目立つ。広島平和記念資料館に関するトリップアドバイザー上で公開されている日本語口コミを分析した結果、観光者は当初の広島観光の目的が何であれ、広島平和記念資料館を訪れ、展示から擬似的な「被爆体験」を得て、被爆者の「思い」を受け止め、共有し、程度の差こそあれ、「人間としての役割」を感じ、何かしなければならないと述べる。換言すれば、広島平和記念資料館訪問という、いわば平和観光を通し、観光客は、被爆体験の継承に関わっているとも指摘できるのである。さらに具体的に、広島市の平和都市理念と口コミに見られる表現の間にどのような整合性が現れているかを精査するため、再再度、以下の抜粋を掲げ、考察点を下線で示す。なお、番号は筆者らによる。

人類史上最初の被爆都市である広島市は、(1)平和を願い、平和都市の建設を進めてきた先人の努力をしっかりと受け継ぎ、(2)ヒロシマの願いである核兵器廃絶と世界恒久平和の実現を目指す「まち」であり続けなければなりません。そのためには、市民一人一人が被爆者自身の(3)被爆体験や平和への思いを引き継ぎ、共有し、その思いを世界に広げ、各国の為政者が共感するようにしていく必要があります。

まず、(1)については、平和の希求に関する表現が、観光者の言説にもみられる。「平和都市の建設…の努力」は、該当する表現が口コミにみられない。しかし、観光者は広島市外からの訪問者が多いため広島市政に関わる

[14] 次のURLを参照。
https://www.tripadvisor.jp/ShowUserReviews-g298561-d320236-r525087652-Atomic_Bomb_DomeHiroshima_Hiroshima_Prefecture_Chugoku.html#REVIEWS (2018年2月1日閲覧)。

ことはないので妥当といえる。次に、(2)核の脅威の理解と世界平和の希求は、大半の口コミに言及されている。そして、(3)被爆体験や平和への思いを引き継ぎ、共有し、その思いを世界に広げる反応と意欲は、十分にみてとれる。ただし、「各国の為政者が共感するように」行動することについての言及はほとんどなかった。つまり、先の思考に関する動詞群の結果にもみられるように、観光者の反応は、概して個人的で小規模な「継承」にとどまっているとも言える。

しかしながら、本研究の分析により、多くの観光者は、まずは「観光者のまなざし」から、被爆体験を見聞きし、疑似体験を介して心を揺さぶられ「当事者」的なまなざしに移行することがわかった。さらには、被爆者とのまなざしの共有から、自主的にネットを通じて語り伝えるという能動的継承に参画していることも明らかである。このように、まずは任意で、平和観光に赴くことで、原爆・被爆体験の知識を得る機会を得て、結果的に興味を持ち、自主参加型の体験継承に発展するという経路があること、あるいはそういった経路を導く可能性の存在が明らかになった。

5. おわりに

本稿では、被爆体験継承における平和観光の可能性について、言説分析を通じて実証的に考察した。言説研究の文脈として、まず広島の二つの世界遺産にまつわる観光の歴史的背景を概観した。特に戦後の広島で、復興の取り組みの一環として「平和(都市)観光」政策が推進された背景を紐解き、被爆の「その後」の市民生活の中に、平和と観光が早期より共存していたことを確認した。次に、原爆ドームと広島平和記念公園観光の場をめぐって、観光者と地元民の間で、目的や視点の相違がもたらす問題点を考察した。これらの背景をもとに、広島の掲げる被爆体験継承のメッセージが、観光者にも共有されているかどうかについて、実証的言説研究を行った。まず、平和都市としての広島市の取組みの理念を説明したテキストを取り上げ、要点を確認した。次に、2009年1月1日から2017年11月17日の期間で旅行情報サイト、トリップアドバイザーに投稿された「広島平和記念資料館」に関する日本語の文章全てを対象に、内容分析を行った。これら二種類のテキストに現れた言説の整合性を、多領域分析手法を駆使し分析した。具体的には、記述的・探索的統計解析法とクリティカルディスコースアナリシスの枠組みにおける手法を援用した。その結果から、被爆者の尊厳を守りつつ、観光者に世界遺産としての原爆ドームの意義を伝え、広島平和記念公園と広島平和記念資料館の社会的機能を効果的に発揮できる平和観光のありかたを議論した。

広島の平和観光においては、市が掲げる被爆体験の継承の理念をいかに、またどの程度観光者に伝え、共有できるかが重要であるため、トリップアドバイザーの投稿における言説的特徴の分析では、広島平和記念資料館へ来館する観光者が、広島に求めるものと、広島の平和観光から得ているものとを考察した。2013年から広島平和記念資料館への国内外からの来館者数が急増している理由については、本稿では考察しなかったが、「外国人が訪れる一番の場所がヒロシマ(ママ)平和記念資料館

と知って行ってきました」[15]といったコメントを見る限り、広島平和記念資料館がトリップアドバイザーやその他の観光サイトでトップ観光地のランキング上位に入ったことも、来館者急増の一因となったのかもしれない。これについては、今後、分析を重ねていく予定である。

2014年以降の口コミでは、広島平和記念資料館の展示内容や改修工事など、観光者が、各年異なるトピックを挙げ、やはり年ごとの特徴があらわれていた。しかし、展示を通じて、被爆体験を学んだ後の反応には、どの年をみても一貫性あるいは共通性があった。驚き、ショック、その他の強い感情の動きや原爆や核の脅威について学ぶことの重要性、被爆の悲惨さと平和の尊さ、人間の尊厳、人として被爆体験を語り継ぐ責任、などである。観光者は、自発的に家族や友人を連れて、再度、原爆について学ぶために広島を訪れたり、インターネットで個人が観光を通じて学んだ被爆体験の情報を小規模ながら不特定多数に継承していると言えよう。

もちろん、一口に継承といっても、何を継承するのかについては様々な見解がある。たとえば、原爆を巡って政治・文化・社会的な意図により構築された被爆の記憶とヒロシマのアイデンティティ(Yoneyama 1999)を語るのもまた継承である。他方、被爆体験と戦争の記憶に関する史実の知識を伝播することや、戦争責任と歴史認識をめぐる被害と加害双方の視点の共通理解や感情を共有すること、それを促す資料の扱い方に留意すること(楊2013)なども継承の一環である。これらの場合、「継承」の意義やその担い手は、公的で集合的である。被爆体験を「ツール」として理解し、国際社会における体験者の社会・政治的位置付けと役割を示唆する「継承」の考え方といえよう。それに対して、本研究の結果が示すように、観光者個々人によるインターネットを介した「継承」は、平和観光の偶発的な産物とも言えよう。それは個人的なレベルに留まっていることが多いものの、任意で自主的・積極的である。インターネットを介して不特定多数に「継承」するため、メッセージの発信力は強く、広範なリーチアウトが可能になる。これもまた、平和観光を提供する側の支援によっては、さらなる可能性が見出せる参加型の被爆体験継承の一つの形なのである。

謝辞

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金(15H03137及び17F17014)の研究成果の一部である。

また、本稿は、2017年12月11日開催の北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院メディア・ツーリズム研究センター主催国際シンポジウム「平和観光研究の可能性」での報告に修正加筆を行ったものである。司会者・討論者をはじめ、示唆に富む質問・コメントをくださったすべての方に感謝申し上げます。

[15] 2013年7月11日付のトリップアドバイザー口コミ。URLは次の通り https://www.tripadvisor.jp/ShowUserReviews-g298561-d320360-r167125040-Hiroshima_Peace_Memorial_Museum-Hiroshima_Hiroshima_Prefecture_Chugoku.html (2018年2月1日閲覧)。

英語文献

Blanchard, L. and Higgins-Desbiolles, F. (eds.) (2013) *Peace Through Tourism: Promoting human security through international citizenship*, New York: Routledge.

Edgell, D. L, Sr. and Jason R. Swanson (2013) *Tourism Policy and Planning: Yesterday, Today and Tomorrow, 2nd ed.*, London and New York: Routledge.

Heřmanová, E. and Abrhám, J. (2015) Holocaust Tourism as a Part v of the Dark Tourism, *Czech Journal of Social Sciences, Business and Economics* Vol.4, Issue 1, pp.16-33.

Foucault, M. (1995) *Discipline and Punish: The Birth of the Prison*, (translated by Sheridan, A.), New York: Vintage Books.

Hiroshima Publishing Company (ed.) (1949) *HIROSHIMA, Recommended by Hiroshima Tourist Association*, Hiroshima: Hiroshima Publishing Company.

Lennon, J. and Foley, M., (2000) *Dark Tourism: the Attraction of Death and Disaster*, London: Thomson Learning.

Seaton, P.A. (2007) *Japan's Contested War Memories: 'The memory rifts' in historical consciousness of World War II*, London: Routledge.

Urry. J. (2011) *The Tourist Gaze 3.0* (Published in association with Theory, Culture & Society), SAGE.

Yonemaya, L. (1999) *Hiroshima Traces: Time, Space, and the Dialectics of Memory (Twentieth Century Japan: the Emergence of a World Power)*, University of California Press.

英語講演

Yerkovich, S. (2017) Keynote Lecture by the President of ETHICOM- ICOM International Committee for Ethics(国際博物館会議倫理委員会会長基調講演), 2017 ICOM conference on 'Memory, from presumption to responsibility', Brno, Czech Republic, 21-24 November 2017.

日本語文献

池田光穂 (1996) 遺跡観光の光と影　マヤ遺跡を中心に、石森秀三編 (1997)『観光の二〇世紀(二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容３)』、pp.193-206、ドメス出版。

石田忠 (1986)『原爆体験の思想化、反原爆論集１』未来社。

石森秀三 (1992)『新しい観光学の提唱』中央公論、107 号、pp.257-66。

市野澤潤平 (2016) 楽しみのダークネス～災害記念施設の事例から考察する～ダークツーリズムの魅力と観光経験、『立命館大学人文科学所紀要』110 号、pp.23-60。

岩崎誠 (2014)『論』ダークツーリズム考「悲しみ」どう共有する、2014 年 6 月 5 日、中国新聞電子版、<http://www.hiroshimapeacemedia.jp/?p=31796>。

遠藤英樹 (2016) ダークツーリズム試論～「ダークネス」へのまなざし、 A Study on Dark Tourism: Gazing to "Darkness"、『立命館大学人文科学研究所紀要』110 号、pp.3-22。

川野徳幸 (2010) 原爆被爆被害の概要、そして原爆被爆者の思い、『平和研究』35 号、pp.19-38。

川野徳幸 (2018) 被爆体験継承の課題：何を継承するのか、ひろしま復興・平和構築事業報告書(広島県・広島市)、印刷中。

川本寛之、川野徳幸 (2015) 原爆被爆者の「思い」についての一考察–憎しみと責任論の視点から、『広島平和科学』37 号、pp.57-68。

川本寛之、van der Does Luli、川野徳幸 (2016) 原爆被爆者は核兵器廃絶の可能性についてどう考えているのか、『広島平和科学』38 号、pp.57-82。

滝知則 (2014) 観光と平和の関係をめぐる「楽観論」と「慎重論」、『長崎国際大学論叢』第 14 巻、pp.91-101。

中川利國 (2015) ＜研究ノート＞占領軍資料を中心とする広島市復興顧問と復興計画への一考察、『広島市公文書館紀要』28 号、pp.11-30。

西本雅美 (2015) 「平和記念都市ひろしま」―知られざる記録映画、『広島市公文書館紀要』28 号、pp.58(1)-49(10)。

日本経済新聞電子版 2017 年 8 月 6 日、広島原爆遺構を巡って「ピースツーリズム」市が提唱、ドーム・資料館以外も発信。<https://www.nikkei.com/news/print-article/?R_FLG=0&bf=0&ng=DGXMZO19709960W7A800C1AC8Z00&uah=DF04042017232>。

濱谷正晴 (2005) 『原爆体験一六七四十四人・生と死の証言』、岩波書店。

樋口耕一 (2014) 『社会調査のための計量テキスト分析』、ナカニシヤ出版。

広島平和記念資料館編 (2015) 『原爆ドーム 100 年の記憶』株式会社ブレインズ。

松浦陽子、佐藤健一、川野徳幸 (2013)「広島の平和観」ー平和宣言を通してー『広島平和科学 35』広島大学平和科学研究センター、pp.67-101。

楊小平 (2013) 広島平和記念資料館における原爆体験の継承の在り方とその変容、広島大学大学院国際協力研究科博士論文。